

(公社)Knotsの活動と25年の歩み  
—小さな結び目は社会を変える—

富永 佳与子

日本獣医史学雑誌第58号

2021年2月20日発行

JAPANESE JOURNAL OF VETERINARY HISTORY  
No. 58, February 2021

## (公社)Knotsの活動と25年の歩み — 小さな結び目は社会を変える —

富永 佳与子<sup>1</sup>

### — 公益社団法人 Knots 紹介文から —

『Knots(ノッツ)は、「結び目」という意味です。人も含めた全ての動物が、幸せに暮らせる社会を目指して事業を行っています。』

公益社団法人 Knotsには、以下の3つの節目がある。

- 1) 平成12(2000)年5月10日(前身のNPO法人設立)
- 2) 2010年1月12日(一般社団法人設立)
- 3) 2010年11月12日(公益認定)

令和2(2020)年は、団体設立の契機となった阪神・淡路大震災から25年、法人設立から20年、公益認定から10年の節目の年となる。個人のボランティアから法人の公益事業へ、公益法人制度改革の歴史も辿っている。飼い主の視点に立ち、そのニーズに軸足を置いて事業を行い、「こうあって欲しい」という「マーケットイン」の発想を、啓発・教育・研究の立場から情報発信した、「これまでにないもの」への挑戦の歴史を振り返る。

### 1. 法人設立に至るまで(任意団体期)

1995年1月17日午前5時46分、ドーンという音とともに、未曾有の災害、阪神・淡路大震災が発生した。死者6,434人、住宅被害約64万棟(神戸新聞NEXT <https://www.kobe-np.co.jp/rentoku/sinsai/graph/sp/pl.shtml>より)という大きな被害の中で、被災動物も9,300頭と推定され、1,545頭を保護・譲渡するという歴史的動物救援事業が行われた。1年後には、譲渡動物のその後を調査する事業が行われ、子犬・子猫からしか懐かないとされていたものが、成犬・成猫であっても幸せに暮していけることが証明され、その後の動物愛護センターの設置、行政による成犬・成猫譲渡、動物愛護法への改正と続く「人と

---

TOMINAGA Kayoko : PIIA Knots : Its Activities and 25 Years of History  
— Small Knots change the World —

1. 連絡先：公益社団法人 Knots 理事長 富永佳与子 〒650-0032 神戸市中央区伊藤町110-2 伊藤町 YANAGIDAビル7F-12 TEL050-3702-8058 E-mail: info@knots.or.jp

(2019年11月25日受付・2019年12月2日受理)

動物の共生」の礎となった。(この一連の救援事業については、「大地震の被災動物を救うために：兵庫県南部地震動物救援本部活動の記録」<sup>1)</sup>として神戸大学図書館震災文庫で読むことができる。

<http://www.lib.kobe-u.ac.jp/directory/eqb/book/7-156/index.html>)

この1年後の調査は、社団法人日本愛玩動物協会(当時)が行い、その調査員は、愛玩動物飼養管理士が担当した。震災対応を契機に兵庫県愛玩動物飼養管理士会(以下兵庫県管理士会)も組織された。兵庫県管理士会は、任意団体であり、ペットショップに勤務している方やペットを飼養する主婦が中心で、相談や啓発活動を主とした。当時は、ペットブームが始まった頃で、ハスキーやレトリバーといった大型犬が多数飼養されており、その飼養における困難さに管理士資格を取得した人もあった。

兵庫県管理士会では、二つの挑戦があった。一つは、介助犬シンシアとユーザーの木村佳友さんの講演会<sup>2)</sup>を、1998年4月26日尼崎市のホテルニューアルカイク(当時)で開催したことである。当時、まだ介助犬は知られておらず、木村さんは介助犬の盲導犬並み受け入れに向け、孤軍奮闘しておられ、ホテル側もこの講演会を切掛けに介助犬の宿泊も受け入れて下さることになった。この講演会は、毎日新聞<sup>3)</sup> 朝日新聞<sup>4)</sup>でも報道された。

二つ目は、「ワンワンフェスティバル」という啓発イベントの開催である。第1回は、1997年、兵庫県の商業施設『つかしん』。災害救助犬、盲導犬、介助犬、警察犬等のワーキングドッグのデモンストレーション、お手入れ講習、飼い主さんの参加型競技など、今日ではよく行われている形式ではあるが、当時は、啓発としての同様の催事は行われていなかった。「愛犬と一緒に出掛けたい」という飼い主ニーズと、犬連れで入れる場所を増やす効果も鑑みての開催であり、同様のイベントは、その後各地で増えていく。兵庫県管理士会でも1998年：兵庫県三田市、1999年：神戸市しあわせの村ハッピーホリデー内での開催・神戸市ポートアイランド第二期芝生広場と続く。神戸市ポートアイランドでの開催時は、兵庫県動物愛護センターや神戸市生活衛生課といった動物行政だけではなく、大震災動物救護メモリアル協議会、(社)日本動物病院福祉協会(当時)、(社)日本動物福祉協会(当時)といった団体、警察犬、盲導犬、介助犬、盛んになり始めたドッグスポーツのfrisbeeやアジリティのデモンストレーション、UCCフードサービスの協力によるドッグカフェ、株式会社ローソンの協力によるミニコンビニ、お役立ちグッズコーナーの東リ株式会社、(財)神戸国際観光コ

ンベンション協会事業との連携と、多様な方々に参画頂くKnotsのスタイルの原型が形作られている。イベントはいずれも好評で、マースジャパンからも協賛金を頂いていた。1999年の神戸市ポートアイランドでの開催では、遂に中内力コンベンション振興財団より助成金を受けることになったが、社会的地位のない主婦の印鑑証明では助成金が受け取れず、(社)日本愛玩動物協会理事長の印鑑証明を頂くことになった。折しも、1998年にボランティア団体に法人格を与える特定非営利活動促進法が成立していた。イベント開催も大きくなり、任意団体では無限責任になることから、NPO法人設立を検討することになった。しかし、兵庫県管理士会を法人化することはできず、有志によるNPO法人設立となった。NPO法人を設立するにあたり、兵庫県管理士会は別途残ることから、マースジャパンの支援は受けられなくなり、「ワンワンフェスティバル」の名称を使用することもできなくなった。

1998年には、兵庫県動物愛護センターが開所、兵庫県管理士会は、協働を進めていた。当時は、阪神・淡路大震災の復興途上であり、兵庫県、神戸市、関係団体の協働・コミュニケーションも密であった。兵庫県の行政獣医師の方からは、「動物の業界は、(伴侶動物、産業動物、野生動物と)行政も取り組む人もバラバラで、横の繋がりが無い。そういったところを繋ぐ役割もして欲しい」と示唆を頂いた。

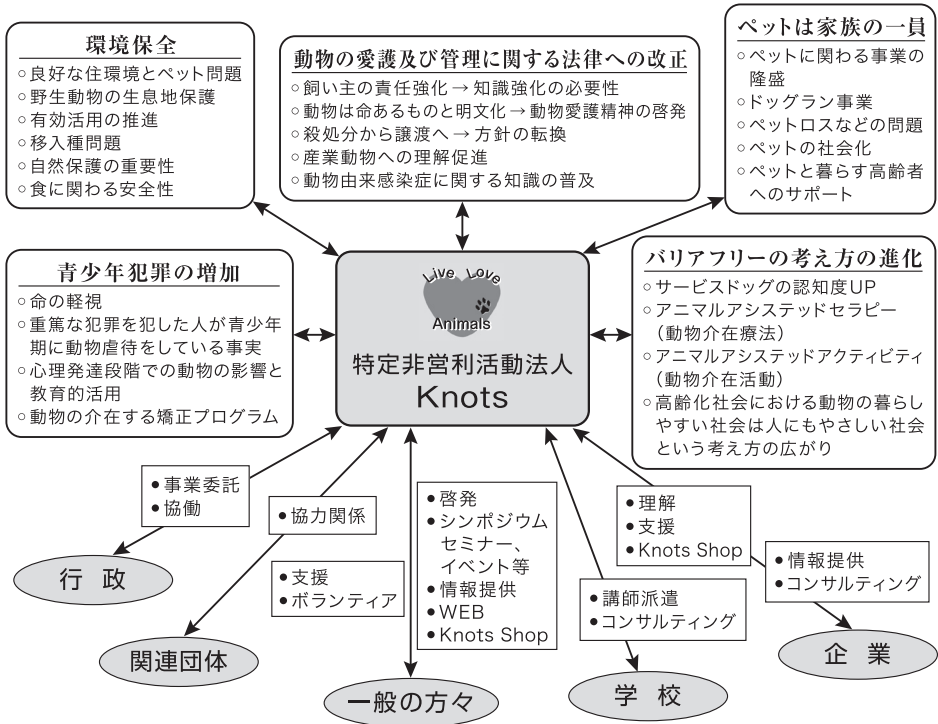
## 2. NPO法人 Knots期(2000年5月10日~2010年1月)

以下は、NPO法人 Knots 設立の趣旨及び活動背景の図である。

「伴侶動物として動物達との暮らしを大切にする人々が増える一方で、周囲との軋轢も生まれています。しかしこれらは、動物の習性や法令等の知識の不足によるものも多く、今までの活動の中で、一般の方々と専門家及び行政などの専門知識を持った方々との解離を感じ、この距離を縮めることが、大切であると痛感しています。そこで、一般の方々と専門家及び行政を結ぶ結び目(knots)として、伴侶動物の適正飼養と動物愛護精神の啓発活動のためのイベントや、適正飼養に係る相談及び情報提供業務を通じて、生命尊重や友愛、平和の情操を育み、ひいては人間及び動物達が共生できる社会の構築に寄与してまいります。

また、こういった活動をベースにし、伴侶動物、産業動物、野生動物という区分を越えて人間と動物達がいかに共生していくかといった壮大なテーマにも取り組んでいきます。」

図1 NPO法人Knots設立の趣旨及び活動背景



NPO法人Knotsのスタートは、管理士会時代から受け継がれた、兵庫県動物愛護センターとの協働「子どもセミナー」である。産業動物、クマ、カメ、武庫川の水辺など、センター獣医師と共に専門家を招聘し、参加親子達と学びを深めた。このような関係が根底にあり、Knotsの事業は行政との協働をベースとしている。ワンワンフェスティバルは、「りぶ・らぶ・あにまるずフェスティバル」として開催することになった。これ以降、「りぶ・らぶ・あにまるず」は、Knotsの啓発事業の総称として使われていく。

NPO法人Knotsとしての最初の大きな事業は、2000年JT関西営業本部(当時)に「伴侶動物同伴旅行」を提案したことである。当時は、一般の飼い主と犬が同じ部屋に宿泊はできなかったが、飼い主アンケートを実施。8割近くの飼い主が、同じ部屋での宿泊を希望しているという結果を元に、同社国内旅行最高級ブランドACEJT西日本のツアープフレット「いっしょに行こうよ」が登場、大ヒットとなった。現在でも、るるぶトラベル「ペットと泊まれる宿」として継続

し、パンフレットの監修を続けており、催事事業の際には、セラヴィリゾート・泉郷様と共に宿泊券のご提供も頂いている。

NPO法人として新たなスタートを切ったKnotsに手を差し伸べて下さったのは、フリスキー株式会社(当時)である。当時の平野副社長は、「君達のような団体が、10年後には必ず必要になるから」と支援を決めて下さった。その後ネスレ日本ネスレピュリナペットケアとなられても、神戸に本拠を置く団体を通じての地域支援として、シンポジウムやフェスティバルといった基幹事業に長くご支援を頂くことになる。

2001年、神戸市の21世紀復興記念事業で、Knotsの大きな転換点となった2つの事業が開催される。まずは、「ドッグラン21-The First Run in KOBE」。計44日間、85m×92mという広大なドッグランが、神戸市ポートアイランドに出現した。<sup>5)</sup>ドッグランそのものも初めてであったが、犬同伴ではない人の入場も認めた。入場者は、ただ走る犬たちを眺めるだけだが、3ヶ月の赤ちゃんや高齢者の方、障害のある方なども含め多くの来場があった。会場では、スタッフ犬による触り方指導、ふれあい教室、しつけ教室、ドッグスポーツ大会・体験会、マナー講座、プロによる撮影会なども行われた。この取り組みは、雑誌、テレビ、新聞、ラジオと多くのメディアに取り上げて頂いた。来場する犬には、狂犬病予防法に基づく鑑札と済票の装着の確認を行い、啓発に取り組んだ。「動物との共生」に掛かる青少年教育や高齢者福祉への知見が広がり始めていた頃でもあり、専門家がバックアップする体制をきちんと組めば、飼っている人だけでなく、飼っていない人の為の施設にもなるという手応えを得た。この後、2004年から、六甲山カンツリーハウスにて、催事としてのドッグラン開催の運営を受託する。2日間のイベントとして始まったが、ドッグラン21で培った専門家が常駐する形式で運営し、現在は、春と秋、10週間程度ずつ土日祝に開催されている。16周年を迎え、来場した犬の登録数は、2017年に1万頭を達成。2020年9月現在、13,000頭を超えている。

ドッグラン21の中で行われたドッグスポーツ大会は、大好評となり、りぶ・らぶ・あにまらずフェスティバルは、2003年「Enjoy Sports with Dogs」としてドッグスポーツ(フリスビー・アジリティ・ギグレース・ケーナインフリースタイル[人と犬のダンス])を主体に秋に開催されていく。神戸市動物愛護協会は、この時より共催を継続している(神戸市内開催の場合)。2007年までは、ポートアイランド2期芝生広場での開催で、神戸市動物愛護協会矢田会長(神戸市長夫人・当時)がご挨拶され、ネスレピュリナペットケアのハマー社長(当時)が、愛犬の

ジージーちゃん(アイリッシュ・ウルフハウンド)とハンナちゃん(ラブラドル・レトリバー)をお連れになるなど、華やかな雰囲気で開催されるようになっていた。当初は会員向けに、総会イベントとして2002年5月に開催したPlay Day with Dogsは、2003年、その年に販売を開始したワンちゃんのおやつ(Knotsクッキー・ケーキ)を作って頂いている「小規模作業所Patch」代表の矢萩しげみさんが催事会場で倒れ、亡くなられたことから、2004年より矢萩さんのYを頂き、Y2Day with Dogsとして2007年までは、神戸市ポートアイランド芝生広場で開催した。2008年は、芝生広場の閉鎖に伴い、フェスティバルは兵庫県三木市で、Y2Day with Dogsは、神戸市しあわせの村での開催となった。これだけの犬が一堂に集まり、また犬達の身体に優しいコンディションを保てる開催場所を見つけることは難しく、2009年からは、春と秋の開催を秋に統一して神戸総合運動公園での開催に落ち着いた。

Knots独自の取り組みとして、2000年から「りぶ・らぶ・あにまらず賞」を創設した。人と動物との共生のための商品や活動を高く評価すると共に感謝の気持ちを伝えるもので、企業商品部門、企業CM部門、企業活動部門の3部門に分かれ、毎年一般の方々よりノミネートを頂き、審査員の投票によって各部門賞とグランプリを決定した。表彰式もフェスティバルの中で行っていた。2019年、一定の役割を果たし、終了している。

前述の通り、2003年より「Knotsあったらいいなシリーズ」として安心・安全な犬用おやつの開発と販売も開始した。現在は、障害者自立支援事業として継続している。

二つ目は、動物愛護法改正を受け、「神戸21世紀・復興記念事業/環境省動物愛護週間地方行事「りぶ・らぶ・あにまらず21～21世紀の人と動物の共生へ向けて～」(主催：りぶ・らぶ・あにまらず21実行委員会—環境省・兵庫県・神戸市・NPO法人Knots)として、国際シンポジウム(神戸国際会議場)とパブリックフォーラム(ワールド記念ホール)を開催したことである。国際シンポジウムには、現在、世界最高のシェルターとして日本からも見学者の絶えないベルリン・ランクヴィッツ動物保護施設(当時は現在の施設が建設中)代表のフォルカー・ヴェンク氏、世界動物保護協会(WSPA)法務統括責任者ドラガン・ナスティク氏、フランスのアメリア・タルジ氏、米国HSUS副会長リック・スウェイン氏(米国同時多発テロの影響で来日叶わず)(何れも当時)、日本からは、環境省自然環境局動物愛護管理室室長補佐、兵庫県県民生活部健康福祉局生活衛生課動物衛生係長が登壇した。また、パブリックフォーラムでは、犬連れで入れ

るように工夫し、犬のファッションショーなども行われた。教育委員会や来日スピーカーの領事館の後援、多くの企業・団体に協力・協賛・賛同を頂き、沢山のKnotsを結んで、大きな事業を成し遂げていく、りぶ・らぶ・あにまらず形式を、シンポジウムや室内フェスティバル開催の面でも開始した。この後、「りぶ・らぶ・あにまらずシンポジウム」は2008年まで毎年開催される。そのテーマは、アレルギー予防や虐待予防、高齢者との関わり、再犯率ゼロの青少年の更生、READプログラム(読書教育支援)、発達障害分野、シェルター・マネジメント、動物看護師、野生動物の有効活用と当時の先進的な課題について、海外スピーカーも招聘する等、的確な情報と共に、議論の場を提供した。(詳細は、Knots Webサイトを参照)。

<http://knots.or.jp/corporation/project/symposium.html>

阪神・淡路大震災15年を迎えた2009年、これまでの国際シンポジウムの経験を活かし、基調講演と9つのワークショップから構成される第1回神戸アニマルケア国際会議-ICAC KOBE 2009・併設展示会を開催。基調講演は、「阪神・淡路大震災における動物救護について」市田成勝氏(大震災動物救護メモリアル協議会会長)。関わる団体の数や発表者も大幅に増え、10年間でKnotsの結び目は、大きく広がった。

野生動物の分野でも兵庫県立人と自然の博物館との協働から大きな影響を受けた。特に三谷雅純先生には、様々なご示唆を頂いた。また、駆除されたシカの肉の有効活用として犬のおやつへの活用を提案し、小規模作業所Patchが製造を担当し、2004年、ニホンジカジャーキーが、あったらいいなシリーズに加わった。その後、宍粟市の主婦グループ(現:しそうの森の贈物グリーンキーパー)も参加。2005年には、島根県美郷町とおおち山くじら(猪)の肉と骨を用いた犬用おやつも開発した。

この他の行政との協働は、2006年には、神戸市動物愛護協会50周年記念事業<sup>6)</sup>の運営を担当、椎名誠氏講演会「世界で見た人間と動物ーの現場」を開催。第6回全国障害者スポーツ大会のじぎく大会での身体障害者補助犬開会式行進等の運営協力。神戸市王子公園入園者アンケート。2008年には、神戸市垂水区の動物愛護フェスティバルを受託している。

### 3. 公益社団法人 Knots 期(2010年1月～現在)

「神戸は、「神の扉」という名前の街」、阪神・淡路大震災の折、海外のリポーターが叫んだ。神戸は、役割のある街なのだと考える。Knotsは、その扉を次々に開き、その気付きを啓発・教育・研究の分野で伝えてきた。



2006年、「公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律」が成立し、寄附金に税控除が受けられる制度を活用できる環境が整い、公益社団法人への移行という新たな挑戦と向き合った。NPO法人から直接移行出来ず、一般社団法人を設立し、NPO法人を清算、事業を一般社団法人に譲渡して公益認定を受けるというステップが必要であった。膨大な事務作業を乗り越え、公益社団法人 Knots は、誕生した。

活動理念は以下の通りとし、「人も動物も幸せ」というテーマを明記した。

図2 Knotsの活動理念



「このような中、人も動物も幸せに生きられる社会とはどのようなものでしょうか。人と動物、動物と動物の間には、それぞれ関係性があり、影響し合っています。その関係性を正しく理解し、お互いがお互いを尊重し、バランス良く生きること、つまりそれぞれの「いのちが調和」することが幸せに繋がるのではないのでしょうか。人も動物です。しかしながら、他の動物達への影響力は大変大きく、それ故、より良い調和を保つために他の動物達に対して、果たすべき責任があります。

Knotsは、人も動物も幸せに生きられる社会にむけて、私達に出来ることを少しずつ行っていきたいと思います。」

NPO法人として自分達の目指すものを第一に考え事業を展開してきたが、公益法人として公益事業をより公正な道筋で行なっていく為、高い見識を持った

方々に忌憚なくご指導を賜る、非公式のアドバイザーボードを設置、2011年8月5日、第1回を開催した。現在は、福地茂雄様(元アサヒビール株式会社社長)、柴内裕子様(公益社団法人日本動物病院協会 相談役/赤坂動物病院 総院長)、多田幸雄様(株式会社双日総合研究所 相談役)、出来由紀子様(株式会社フォスター 代表取締役)、近藤智子様(MS&ADインシュアランスグループホールディングス株式会社 常勤監査役)、奥野敦史様(株式会社マイナビ メディカルコミュニケーション部 部長)にお務め頂いている。

この移行期を含む2010年1月より2013年12月、マース・ジャパン・リミテッドの支援を受け、HCJ(ヒューメインセンタージャパン)事業を、社団法人日本動物福祉協会(当時)と共同で立ち上げ実施した。HCJ事業は、「人も動物も幸せにすることを目的に、市民の結束と産業界の支援協力、行政が連携。譲渡事業の周辺支援を中心に、人と動物に関わる様々な問題に、研究・教育・コミュニケーション(啓発)の手法で解決策を提案・実施していこうとするもの」で、「シェルターメディスン」の講演会や、奈良県との協働により、欧米での「動物愛護法」の運用や「ヒューメイン・エデュケーション」について学ぶ機会を設けた。最も大きな事業は、アジア型ヒューメインエデュケーションの構築を目指して、2012年6月より奈良県と連携協定を締結した「奈良県のいのちの教育プログラム」の普及支援である。奈良県のいのちの教育プログラムでは、張り子の教材がキーとなる為、意欲のある8つの自治体に簡易版を提供、「奈良県のいのちの教育プログラム」普及の最初の大きな契機を創出できた。

HCJ事業終了後も、Knotsは単独で、「奈良県のいのちの教育展開事業」において、奈良県との連携協定を継続し、現在に至っている。奈良県では、「いのちの教育研究協議会」を別途組織されており、公益社団法人 Knots 理事長は、同協議会の副会長を務める。「いのちの教育」プログラムは、県畜産技術センターの跡地活用である「奈良県うだ・アニマルパーク」を拠点に実施されており、教員2名が配置され、当初、モデル校20校で始めた事業は、現在、モデル校60校となり、県教育委員会の協力もあり、各小学校の教員が自らプログラムを教えることができるように研修が始まり、早期の県内200校全校実施を目指している。年に1回、主として自治体向けの研修会を実施しており、毎回、20前後の自治体の参加がある。宮崎県、大分市、八王子市など、独自のアレンジを加えて、プログラムを導入する自治体も出てきている。

この研修会の実施の中で、いのちの教育プログラム規模の啓発実施は難しいが、何とか取り組んでいきたいという自治体からの相談も多くなり、「教育ツ-

ル共有」事業を設けた。既に教育ツールを制作し、実施している自治体の協力で、類似のツールの制作を認めて頂くことにより、できるだけ早期に、安価に教育ツールを提供していこうというものである。京都市の副読本は、京都市の小学校1年生全員に配布されることになり、神戸市の副読本制作、明石市の教育ツール開発と徐々に拡がりを見せている。

りぶ・らぶ・あにまらずシンポジウムでは、2010年「子ども達の無限の可能性と明るい未来を取り戻すために～動物介在療法と子ども達の心の危機管理」、2013年「PTSDとアニマルセラピー～その可能性を探る」と人の心のケアについて取り組んだ。

2011年、東日本大震災が起こった。そこで改めて思い知らされたのは、「飼い主」の立場の脆弱さだった。阪神・淡路大震災当時と変わらず、避難所や仮設住宅に伴侶動物を「入れる・入れない」の議論が展開され、「動物の保護」の名の下に、飼い主は、伴侶動物から引き離されようとしていた。「被災された飼い主さん達の気持ちが理解できるのは、被災経験のある神戸」と東日本大震災飼い主さん支援として「ずっと一緒にいようプロジェクト」を開始。「私達があの震災で学んだのは、『キミが居たから頑張れた。キミが居るから生きていける』という関係が、ペットと人にも成立するということでした。ペットはそれぞれの日常でもあり、飼い主さんが、力強く生きていく力を生み出します。」とメッセージを発信した。折角、一緒に助かった命。「離したら、いかんよね」という思いだった。2016年熊本地震では、環境省が飼い主支援に動かれた。譲渡するのではなく、飼い主と一緒に居られる状態になるまで預かるというものだった。現在では、「同行避難」が政策となっている。一つの願いが叶った。Knotsでは、『被災された方がペット可住宅に入居される際の支援』として、1件3万円を助成する事業を実施し、23件の支援を行なった。

「ずっと一緒に」居られなくなる危機は、大規模災害だけではなく。不慮の事故、病気、経済環境の変化など、日常に潜んでいる。特に、動物管理センターの引き取り事由から、高齢者の飼育継続困難による、老老の哀しい別れが際立ってきていた。ICAC2014・2015を活用して「ずっと一緒に居られる社会」をテーマにシンポジウムを設定し、「地域社会を幸せにする伴侶動物飼育支援システム」を議論し、その成果を『「伴侶動物との暮らし」を活用した「高齢者が幸せに暮らせる社会システム」の提案』として論文にまとめた。一般社団法人シニア社会学会機関紙「エイジレスフォーラム第14号(2016年6月)」に掲載された。

ICAC KOBE(神戸アニマルケア会議)は、公益社団法人となったことを受け、より広く協力を得られるようになり、内容も、充実していった。「お互いの存在に『感謝』し、生ある限りは『幸せ』であることが、いのちに対する『責任』である。」と、我々人間が、全てのいのちに対して果たしうる責任の在り方を位置付けた。神戸を表す、「アクア(神)」「プカ・コモ(扉)」、「マハロ(感謝)」「ハウオリ(幸せ)」「クレアナ(責任)」の5匹のオリジナルキャラクターは、2019年、LINEスタンプとしても登場し、活躍の幅を広げている。また、2015年より正式名称を「神戸 全ての生き物のケアを考える国際会議 KOBE International Conference on the care for All Creatures」として、より広いフィールドを用意することになった。各シンポジウムは、主宰する各専門団体に内容を一任し、その時々、各分野で注目される内容を議論頂いた。専門性も高まり、ICAC KOBE 2015では、獣医16大学(当時)や(一社)ペットフード協会の他、公益財団法人日本モンキーセンター/神戸大学大学院農学研究科/長崎大学熱帯医学研究所/関西学院大学 災害復興制度研究所/同志社大学 良心学研究センター、同 生命倫理ガバナンス研究センターにも特別協力を頂いた。50以上の学会や団体、行政機関が、後援、協力といった形で、支えて下さった。分野別の会議アドバイザーも設置した。

(その他の詳細は、Knots Webサイトを参照。

[http://knots.or.jp/corporation/project/international\\_conference.html](http://knots.or.jp/corporation/project/international_conference.html))

各回の基調講演は、以下の通り。

- ICAC KOBE 2012「その医療と健康管理」一人と動物の未来のために  
基調講演：長崎大学学長(当時)片峰茂氏「感染症は如何に制御できるのか」
- ICAC KOBE 2014 一人と動物の未来の為にー  
基調講演：喜田宏氏(日本学士院会員/北海道大学特別教授/北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター統括/OIE世界鳥インフルエンザレファレンスラボラトリー長/WHO指定人獣共通感染症対策研究協力センター長)(当時)  
「インフルエンザウイルスの生態：鳥インフルエンザとパンデミックインフルエンザ対策のために」
- ICAC KOBE 2015 阪神・淡路大震災の経験を人と動物の幸せな未来へ  
阪神・淡路大震災20年記念大会 One World, One Lifeー  
基調シンポジウム「阪神・淡路大震災の経験を人と動物の幸せな未来へー護るべき大切な日常とは？」

座長：位田隆一氏（京都大学 名誉教授/同志社大学大学院グローバル・スタ  
ディーズ研究科 特別客員教授/同志社大学生命倫理ガバナンス研究センター長/  
公益財団法人 国際高等研究所 副所長）（当時）

※記念大会の為、実行委員会の構成は、以下の通り。

神戸市/兵庫県動物愛護センター/公立大学法人 大阪府立大学 獣医学類/  
公益社団法人 日本動物病院協会/公益社団法人 日本動物福祉協会/  
公益社団法人 Knots（事務局）

Knotsの基幹事業のひとつである「りぶ・らぶ・あにまらずフェスティバル」は、  
会場確保と資金の両面から、2016年より六甲山カンツリーハウストッグランでの  
「ワンちゃん大運動会」との共催での継続を図っている。また、2019年からは、神  
戸市動物愛護協会、（公社）神戸市獣医師会、（公社）Knotsで実行委員会を構成、  
「神戸市動物愛護フェスティバル」を神戸市の総合福祉ゾーン「しあわせの村」で  
開催していくこととなった。SDGs視点での先進施設であり、2019年30周年を  
迎えたしあわせの村には、2021年新たな動物共生拠点の設置が決定しており、  
今後の展開が期待されている。

Knots 理事長は、2019年神戸市動物愛護協会の理事に就任。同協会の動物  
愛護図画にも、「Knots賞」が制定された（2020年は新型コロナウイルスの影響で  
中止）。

2017年4月、「神戸市 人と猫との共生に関する条例」が施行され、「神戸市人と  
猫との共生推進協議会」（<http://kobeneko-happy.com>）が組織され、Knots 理事  
長は、監事を勤めている。この条例は、先進事例として注目されており、神戸市  
のふるさと納税でも、動物愛護事業に多くの寄附が集まっている。

この他、野生動物有効活用推進事業は、兵庫県森林動物研究センターとの協  
働で、有害鳥獣として捕獲された鹿肉の有効活用の取り組み（旧ニホンジカ有効  
活用研究会）として続いていたが、鹿肉については、流通にかかるネットワーク  
組織も立ち上がった為、野生動物全般における共生研究へと対象を広げるこ  
とになった。「野生動物研究会」と名称も変更になったが、変わらず幹事団体  
を務めている。

2017年より、産業情報新聞社ペット&Lifeに「PIIA Knots リレー・エッセイ」  
のコーナーが始まった。約2ヶ月に1回発行されており、Knotsがお世話になっ  
ている皆様に「人と（ヒト以外の）動物の幸せな共生」をテーマにエッセイを頂い

ている。Knotsらしく、感染症から、野生動物、産業動物、ペットとのお出掛けまで、産官学の幅広い皆様からのお話を提供している。

Knotsのウェブサイト<sup>7)</sup>は、国立国会図書館インターネット資料収集保存事業の対象であり、2015年から毎年1回保存されている。また、他団体の情報も掲載したメールマガジン配信先は、1,000を超えている。

資金面に関しては、経済の低迷の影響を徐々に受けることになった。また、コンプライアンスやガバナンスが重視され、企業の株主への説明責任の比重も高くなるにつれ、CSR(企業の社会的責任：日本では社会貢献の意が強い)からCSV(Creating shared value：共通価値の創造)という流れが言われるようになった。特に欧州型CSRを実践されるネスレ日本では、事業を通じての社会課題解決が全社方針となり、2015年にNPO時代から続いたKnotsへのご支援は終了となり、その他の企業も、これまでのような大きな寄附での支援は、困難となっていった。ICAC KOBE 2015は、そのような厳しい状況の中、阪神・淡路大震災20年を日本ヒルズコルゲート株式会社とロイヤルカナンジャポン、アサヒグループホールディングス株式会社、六甲山カンツリーハウス、DSファーマアニマルヘルス株式会社、ペットライン株式会社、au損害保険株式会社が支えて下さった。また、Meet IN KOBE 21、公益財団法人中内力コンベンション振興財団は、NPO以前から、神戸で開催する大きな催事に、ご支援を下さっている。Knotsでは、賛助会員組織をKnots ALOOHA Clubとして再構築しているが、今後は、公益事業収益や助成金による自己資金運営を中心にして行かざるを得ない。また、公益法人法の収支相償の規定等、制度ともしっかりと向き合っていかなければならないのが現実である。

#### 4. Knots NEXT 次に目指すもの

Knotsは、次のテーマに、ICAC KOBE 2015でも使われた「One World, One Life」を選んだ。「ひとつの豊かな地球は、ひとつひとつのいのちの幸せを繋いでいくことで構築されていく」という概念で、「人と動物の共生」という視点から社会の在り様を見つめ続けた中で、「生き物としてのヒト」という視点が、社会システムに欠落しているのではないかという疑問に辿り着き、生まれたものである。生き物であるヒトは、生まれ、そして死んでいく。「生ある限りは幸せに」といういのちへの責任を果たせるよう、各々のいのちに寄り添う社会システム構築に向け、情報交流、啓発、教育、研究を行っていければと考えている。

## 5. 最後に

様々なところで指標とされているSDGsやSociety5.0による新たな利便性の創出は、今後の事業展開を支えてくれるものと期待している。今後も、小さなKnotsを温かくご指導、ご支援頂ければ幸いです。

## 謝辞

Knotsのような小さな団体にも、「四半世紀は立派な現代史」と、このような振り返りの機会を下さった日本獣医史学会 前理事長の小佐々学先生、理事長の小野寺節先生、事務局長の杉浦勝明先生始め、学会の皆様に改めて感謝申し上げます。

## 参考文献等

- 1) 「大地震の被災動物を救うために：兵庫県南部地震動物救援本部活動の記録」  
(編集委員会編)
- 2) 介助犬ユーザー木村佳友氏フェイスブック
- 3) 毎日新聞(1998年4月15日付)
- 4) 朝日新聞(1998年4月27日付)
- 5) 「神戸からありがとう 神戸21世紀・復興記念事業 花のプログラム記録集」  
(編集委員会編)
- 6) 神戸市動物愛護協会50周年記念誌
- 7) 公益社団法人 Knots ウェブサイト <http://knots.or.jp>

## Summary

### PIIA Knots: Its Activities and 25 Years of History — Small Knots change the World —

TOMINAGA Kayoko<sup>1</sup>

The Knots organization began in 1995 as a rescue response to the Great Hanshin-Awaji Earthquake (the 'Kobe Earthquake'). By 2000 it was established as an NPO (Non-Profit Organization) and later a GIA (General Incorporated Association). From November 2010, Knots was certified as a PIIA (Public Interest Incorporated Association). The present year marks 25 years since the Kobe Earthquake, 20 years since becoming an NPO, and 10-years since public certification. The organizational changes that Knots has passed through chart a history from individual volunteer activities to corporation-like dynamics. Always, we have carried out projects with a focus on the pet owner's perspective and their actual needs, disseminating

information in an advisory sense that “it would be good to have so-and-so.” In short, our activities have always been about finding new ideas and ways of doing things, even though they may not yet be understood within society. Our field can thereby be summarized as “enlightenment,” “education,” and “research.”

It has been estimated that 9,300 animals were affected by the Kobe Earthquake disaster. The animal-rescue efforts, which moved 1,545 animals to safety and new homes, was truly historic. It had usually been thought that only new pets at puppy or kitten age can re-bond if re-housed but, a year later, a study of the transferred animals showed that adult dogs and cats can also continue to live happy lives. This became the cornerstone of Knot’s subsequent “coexistence of humans and animals” efforts with the establishment of an animal well-being center, the re-homing of adult dogs and cats by the government, and revisions to the Act on Welfare and Management of Animals. The survey one year later was conducted by the Japan Pet Care Association.

At that time, the process of post-earthquake reconstruction was underway with Hyogo Prefecture, Kobe City, and related organizations all closely collaborating and communicating. As one of the government’s veterinarians from Hyogo Prefecture pointed out, “The administrative officials working with animals are separated between their different industry areas-companion animals, industrial animals, and wild animals. They have no horizontal connections. I would like to see them creating “knots” among those places.” This suggestion for ‘knots’ was an inspiration to us.

The non-profit ‘NPO Knots’ is focused on realizing a society in which ‘humans and other animals can coexist in a more mutually positive relationship.’ Knots’ activities are wide ranging and cover wild animals, industrial animals and companion animals. Knots provides awareness-building activities, practical information and direct consultation. Summarized into one phrase, Knots ‘creates PLACES that help realize a better society for human and animal coexistence.’ For example, under ‘awareness-building activities,’ Knots holds, i) symposia for learning about the coexistence of people and other animals, ii) dog events as fun opportunities for owners to communicate (and for people in general) to appreciate the importance of better discipline and manners, and, iii) seminars for children to teach them about valuing ‘life.’ These are experiential PLACES for people to enter. The driving force behind Knots is our belief in the mission to create many



such PLACES where people can appreciate the joy and wonder of ‘human/animal co-existence.’ Assimilating these PLACES builds the momentum that will achieve co-existence and a better society. All of this is reflected on the ‘PLACES’ website which has useful information about making a better society for humans and animals, packed with a wide range of factual and reliable animal-related data.

“PIIA Knots” has aimed to improve ways of living for ‘all kinds of lives’ by tying ‘people to people.’ and ‘people to animals.’ Our aim, by multiplying the ties, is to create a ‘happy society for people and other animals.’ We believe we need to ‘live in a better balance’ by better appreciating the relationships between us and a mutual understanding. This is important to all living things. Working for such ‘harmony’ in the balance between Earth’s animal populations will lead to Knots’ ultimate aim-realizing a ‘better consortium’ (mutual dependency between two organisms) and a ‘society in which both people and animals are happy.’

Over the course of 25 years, we have taken on many challenges. We have given a lecture about service dogs, and made it possible for them to be admitted into hotels in the same way as guide dogs. We have organized dog festivals with an original new format. We have formed knots between governmental bureaus and across different types of organization. These knots have been achieved in cooperation with businesses and with a wide variety of participants. We have also arranged dog sports including dog runs with professionals. Based on findings from a pet-owner survey, in which people stated that their pet should be allowed to share their hotel room when they travelled, Knots approached Japan Travel Bureau. As a result, we were able to bring such trips into reality. We have held symposia addressing advanced-level topics for professionals and experts. We have worked with Hyogo Prefecture in support of wildlife management. Knots has also been supporting the independence of a group of special-needs people who are now manufacturing and selling doggy snacks. We have proven and popularized the evidence that, following a large-scale disaster, pets are important to the well-being and recovery of their owners so should not be separated. An “Inochi (life) Education for Children” program has been developed with Nara Prefecture.

Knots also founded the “International Conference on the Care for all Creatures,” (ICAC), which has been organized several times in different years as a “Kobe 21st Century Restoration Commemorative Project.” There

have been symposia on how to create support systems for companion-animal keeping that bring well-being and joy to local communities. Papers have described the results of social programs by which “Elderly People Live Happy Lives Utilizing the Idea of ‘Life with Companion Animals.” The ICAC events are held with the cooperation of more than 50 universities, local government bureaus, institutions and businesses. The ICAC mission is about “being ever thankful for each other’s existence and living happily for as long as our life continues – that is our ‘responsibility’ for life.

The theme “One World, One Life” defines Knots and was used for the ICAC 2015 meeting. The ICAC 2015 declared that “a more united and enriched Earth can be formed by first joining the well-being of individual lives, one by one, as a first step to bring the concept of “One World, One Life” to reality.” All living creatures are born and eventually die. If we can exchange information, enlighten, educate, and research we can build a social system in which we exercise our responsibility for every life. We expect that new advantages gained from sustainable development goals (SDGs), and Society 5.0 will support our own project development in the future. We look forward to your continued warm and generous support, as well as advice, to strengthen all the “small knots” we are tying between our fellow humans (as living creatures), other animals, and society.

I. TOMINAGA Kayoko

Chairperson, PIIA Knots

Ito-machi, YANAGIDA Building 7F-12, 110-2 Ito-machi, Chuo-ku, Kobe 650-0032, Japan

TEL : +81-50-3702-8058 E-mail : info@knots.or.jp